ある。此葉体を縦断するとフラスコ形の被子器が現れる (Fig. 5 参照)。被子器の内部は側絲はなく子嚢が簇生して居るが完全な胞子を有するものは見附からなかつた，此の検査は数ケ所場所を異にして断面を作つたが粉子器 (Pycnide) は立派のものがあつたが成熟した胞子が完全に充実して居る子嚢は見出し得ず，貴重な標本の損傷を考慮しそれ以上標本を犠牲とすることを断念した。然し筆者が最近手掛けたネパール産の *Dermatocarpon Moulinsii* (Fauna and Flora of Nepal Himalaya, p. 43) と比較し内外の形態全く一致するので本種と断定した。本種は欧州ではピレニース，チロール，亜細亜ではヒマラヤ次で北米の各地に出現するもので稍々珍種に属する。本種が日本領土内に内現したことは分布上驚くべき事ではないにしても此狭い国土がまだまだ珍品を埋蔵して居ることを示唆するものと云えよう。

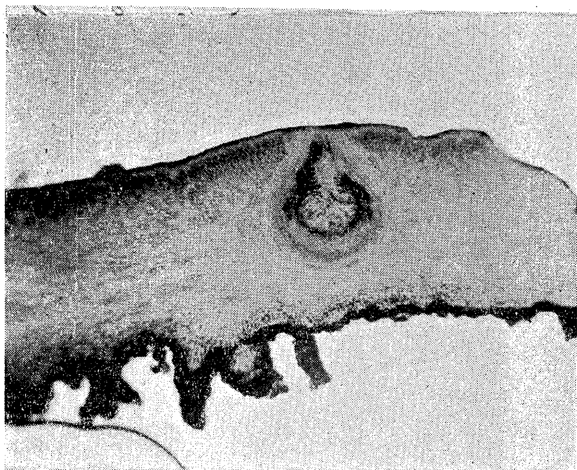


Fig. 5. Longitudinal section of *Dermatocarpon Moulinsii* (Mont.) Zahlbr. for Japan.

○Genus Amana, Honda を支持する (久内清孝) Kiyotaka Hisauchi: I support Genus *Amana* Honda.

アマナやヒロハノアマナを *Tulipa* 属から分離して *Amana* 属をたて，其理として項目をあげこれを日本生物地理学会々報 Vol. 6 No. 3 (1935) で発表したのは本田正次博士である。爾来同氏の日本植物名彙やまた今回の改訂日本植物名彙にも *Amana* を用いていられるが他の人たちの書ではこれが用いられていない，しかし，用いない理由はかいてない。大井氏の日本植物志もそうである。*Amana* をたてた理由は上記本田氏の論文にかいてあるが，私は幾瀬マサ著日本植物の花粉にあるように花粉粒が 1-sulcate である点でも 3-sulcate の *Tulipa* と異ることをつけ加えて *Amana* 属を支持する，もつともこれは園芸種となつている tulip の花粉との比較の上でのことであつて 50 種にも近い全部を比較したわけではない。

Amana is the genus name established by M. Honda in the Bulletin of the Biogeographical Society of Japan vol. 6 (1935) No. 3. involving 2 Lilicaceaous plants *A. edulis* and *A. latifolia*. In *Tulipa* the pollen grain is 3-sulcate while that of *Amana* is 1-sulcate and such palynological fact seems good enough to support Honda's oppinion.